

広報まるがめ6月号 《ほっとコラム人権》 多文化共生のまちづくり

外国人の観光客及び労働者が急激に増えてきていることを、身近な暮らしの中で実感されている方も多いと思います。市内には36の国と地域、約2600人の外国人が住んでいます。(2024年4月現在)3年前と比べ約1.7倍に増加するなど、学校、地域社会、職場など日常生活の様々な場面で外国人と接する機会が増えてきています。国籍・地域別では、中国が約28%、フィリピンが約18%、ベトナムが約14%、インドネシアが約13%、ペルーが約11%と続きます。外国人の増加は今後も見込まれています。

こうした外国人の増加に伴い、言葉や文化、生活習慣や価値観の違いなど、外国人と地域住民との相互理解の不足による誤解やトラブルも見受けられます。外国人に対して、「郷に入れば郷に従え」と日本の文化や慣習を押し付けようとする考えがありますが、本当にそれでいいのでしょうか?自分らしく誇りを持って生きる権利、人権は、世界中のすべての人々が持っている権利です。国籍や民族の異なる人々が共に生きていくためには、異なる文化や慣習の多様性を受け入れ、お互いの違いを認め合い尊重することが大切です。

さらに、特定の民族や国籍の人々を地域社会から排除しようとする差別的言動、いわゆるヘイトスピーチは、2016(平成28)年に「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」(ヘイトスピーチ解消法)が施行され、違法行為として位置付けられ、表面上は減少したように見えるものの、最近では、インターネットを巧みに使うことで、その形態がより悪質なものになりつつあります。

日本人と外国人が共に暮らしやすい地域社会を形成するためには、本市に暮らす外国人も同じ地域の一員として迎え入れる開かれた地域社会づくりを進め、すべての人が同じ人間として人権や人格を尊重し合い、異なる文化や考え方を認め合う多文化共生意識の醸成が極めて重要です。



広報まるがめ8月号 《ほっとコラム人権》 はじめの一步

性自認で悩む人が、心の葛藤や苦悩を話すのをテレビで見たことがあります。しかし、当事者の思いを知ろうとせず、その報道をただのニュースとして聞いてしまうと、当事者の本当の葛藤や苦悩は分かりません。

実際に、その葛藤や苦悩を直接聞く機会を得たときに、事実を知ろうとせずにいた自分の人権意識の低さに気付かされることがあります。知ること、つながることで、その人の人権を守ること、さらには自分の周りの人々や自分自身の人権について考えることにもつながります。

部落差別においても、差別の現実に学び、実態を知ろうとしないと、差別の本質や根深さなどに気付くことができず、差別を見抜く力も付きません。部落差別はする側の問題であり、人権教育の中心的課題として捉えられています。

しかし、実際にこの差別を自分事として考えている人はどれだけいるのでしょうか。自ら知ろう、差別されている人とつながろうとしたとき、差別の不合理な点や自身の差別意識にあらためて気付くことができるのではないのでしょうか。

身の回りには、知らないことで差別に気付かないことがたくさんあります。だからこそ、正しく知ることが差別を無くし、人権を考えていく“はじめの一步”と考えます。

丸亀市では、「同和对策審議会答申」が出された、8月11日を含む1週間で『わたしたちの同和问题週間』としています。この機会に、私たち一人ひとりが家庭や地域、職場などで同和问题のことを考え、「差別の意識を次の世代に残さない」という認識のもと、この問題を自分事として考えていくことが大切です。

広報まるがめ 10月号 《ほっとコラム人権》 知らないうちに

アンコンシャス・バイアスとは、無意識の偏見などと訳される概念です。私たちは、誰かと話をするときや接するときに、「これまでの経験」「無意識の思い込み」「無意識の偏見」などによってあらゆるものを自分なりに解釈してしまうことがあります。

例えば、家事や育児は女性の仕事、男性は人前で泣くべきではない、定時で帰る従業員はやる気がないなどが典型です。さらに、買い物に来た車椅子の当人でなく、付き添いの人に向かって接客する店員など、アンコンシャス・バイアスが引き起こす日常の事例には事欠きません。問題なのは、アンコンシャス・バイアスそのものではなく、「自分のアンコンシャス・バイアスに気付こうとしないこと」にあります。これは、脳がストレスを回避するために、自分にとって都合のよい解釈をしてしまう「自己防衛心」から生まれると考えられています。

自分だけが正しいとの思い込みによる言動が、人を傷つけ、差別になってはいけません。男女共同参画が進まない要因の一つでもあり、社会全体に大きな損失を生むことが想像できます。

環境やインターネットからの影響などにより、いつの間にか植え付けられた偏見や差別意識は、実は誰にでもあります。多様性を認め合う社会の実現に向けての第一歩は、自分の内に潜むアンコンシャス・バイアスにしっかり目を向けることです。普段から先入観を持たずに人の話を聞き、対話する姿勢を徹底することこそが、解決の早道なのかもしれません。

まずは日々の生活を振り返って、自分の言動に思い当たるものがないかチェックしてみるのも良いのではないのでしょうか。

マイノリティ（社会的少数者）の人への偏見や差別意識が伝わる言動の積み重ねのことを『マイクロアグレッション（無自覚に相手を傷つける言動）』と言います。

例えば、以下のような言動は典型的な『マイクロアグレッション』と言えるでしょう。

- ・「アフリカ人だから足が速いんでしょう？」
- ・「男なのにスイーツ好きなんだ」
- ・「障がいがあるのにがんばっていて、すごいね」
- ・「高齢者なのに IT に詳しいですね」

『マイクロアグレッション』をしてしまう側は、マイノリティの人に対して無意識に抱いている偏見や固定概念などが根底にあると言われていています。

これらは、外国人差別や性差別などの場面でよく見られますが、部落差別でも同じことが言えます。「自分は差別しないから関係ない」、「昔の話」、「騒ぎたてるからなくなるならない」これらの言葉には、この問題に関わりたくないという意識が潜んでいるのではないのでしょうか。

差別は、「される側」の問題ではなく、「する側」の問題であり、その中には、「自分には関係ないといった無関心であること」も含まれます。

2016年、部落差別の存在を認め、差別が許されないものであること、その解消に向けて取り組む必要があることが定められた法律「部落差別解消推進法」が施行されています。

私たちは、様々な差別がある社会で生活しています。その社会で、自分の意識や態度を見つめ直し、差別を許さない立場でどう行動していくかが大切です。

広報まるがめ2月号 《ほっとコラム人権》 インターネットと人権

インターネットは、私たちの暮らしを便利で豊かなものにしてくれますが、同時に、危険と隣り合わせでもあることを、きちんと理解しておく必要があります。

例えば、こんな経験はありませんか？

◎友人がメッセージの返事をなかなかかえしてこないことにイライラして、つい、インターネットにその友人の悪口を掲載してしまった。

◎旅行先で友人と写真を撮った。とてもきれいに撮れているが、友人は恥ずかしがると思ったので、黙ってインターネットに掲載した。

◎フェイクニュース（事実と異なる偽の情報）を事実だと思い込み、SNSでシェアしたら、次から次へと拡散されてしまった。

◎SNSで知り合った人と仲良くなったので、実際に会ったら、思ってもいないトラブルに巻き込まれた。

情報発信の匿名性を悪用した誹謗中傷や差別など、インターネット上での人権侵害が増加しています。使い方を間違えると、自分が「加害者」もしくは「被害者」になりかねません。

インターネットの向こう側には、あなたが発信した情報を受け取る相手がいることをいつも意識しましょう。相手の人権を尊重すること、相手の気持ちを配慮することが大切です。

また、インターネットに掲載した写真などの個人情報を完全に削除することは、非常に困難です。自分や誰かの個人情報を安易にブログやSNSに掲載することはやめましょう。

知らず知らずのうちに、自分や誰かを傷つけてしまわないために、正しいルールと知識を身に付け、人権尊重意識を持って、インターネットを利用しましょう。